

[研究論文]

自己犠牲は本当に可能か

—柏端達也著『自己欺瞞と自己犠牲』*を読む—

塩 野 直 之

序

「非合理性の哲学入門」という副題のついたこの著作において、柏端は、自己欺瞞の問題に二割程度、自己犠牲の問題に八割程度の紙幅をあてている。非合理性との関連で最も論じられることの多い、意志の弱さの問題は取り上げられない。自己欺瞞を論じるに際しては信念の論理が、自己犠牲を論じるに際してはメレオロジーが、比較的立ち入って形式的に展開されており、そこにはいささか趣味的な香りも漂わないではないが、ともかくもそのことが本著をひときわ独特のものとしている。この論評において私は、柏端による自己犠牲の扱いの哲学的な側面にのみ焦点を当て、批判的に考察することにした。

I

まず、私の考察に必要となるかぎり、柏端の議論を整理することに相当の紙面を費やさねばならない。そもそも自己犠牲という現象が問題となるのは、およそ行為者の行為とは必ず当の本人にとってよいと思われたものであるはずだという「行為の解釈の根本原則」が、きわめて強力なものと認められるからである。その原則を、柏端はさしあたりつぎのように表現する。

[R1] 行為者はかならず「すべての点を考慮して自分にとってよりよい」と判断されるようなことを選択しようと意図する。(50)

マザー・テレサのような、一見したところ自己犠牲的精神の典型と思われるような人も、実は自分がやりたいと思うからこそ一連の奉仕活動を行っているにすぎないのかもしれない。つまり、この[R1]には従っているのかもしれない。もしそうだとすると、彼女は何も犠牲になどしておらず、実はたいへん利己的な人間であることになる。ここに、「ほんとうに自己犠牲的な行為は存在するのか」という疑問が生じる。

受付日 2007.11.1

受理日 2007.12.17

所 属 福井県立大学学術教養センター

柏端は次いで、上の[R1]が、人間の行為の一般原理としては強すぎることを指摘し、これをさまざまな仕方で弱めてゆく。それは後の自己犠牲の扱いへの重要な伏線となっているので、正確に理解する必要がある。行為者は、二つの互いに相容れない選択肢の中で、どちらがよりよいかを判断できないことがある。しかもそれが、その二つの選択肢がちょうど同じくらいよいからではなく、そもそも両者を比較することができないからであるような場合がある。ある買物客が靴屋に行くと、デザインはよいのだが履き心地が悪い靴1と、履きやすいがデザインの冴えない靴rがある(90～)。ここには、デザインと履き心地という二つの尺度が併存しており、その両者を統合して「靴のよさ」という一つの尺度にまとめ上げることはできない。したがって、靴1を買うという選択肢と靴rを買うという選択肢は、どちらがよりよいかを比較することが不可能である。行為者はここで真正のジレンマに直面し、「理由のない決断」として一方を選ぶ(106～)。

上のような「理由のない決断」を行った行為者は、合理的であろうか、それとも非合理的であろうか。柏端は、「よさ」の最上級に、「最善」と「極善」という二つの概念を区別することによって、この問題を切り抜ける(73～)。靴1と靴rは、どちらがよりよいか比較できない。だが1は、1'や1"、1'''などとは比較可能であり、それらよりはよかった。rもまた、r'やr''などとは比較可能であり、それらよりもよかった。このとき1'やr''には、よりよいものがあるから、それらは最善でも極善でもない。他方、1とrは比較不可能であり、1がrよりよいわけでもなければ、rが1よりよいわけでもない。この意味で、1とrのそれぞれは、「すべての選択肢の中で最もよい」という意味での「最善」の選択肢ではないものの、「他にそれよりよいものがない」という意味で、「極善」の選択肢なのである。

上の区別をふまえて柏端は、行為者の合理性にひとまず二つの度合いを区別し、ここで「理由のない決断」を行った買物客を、弱い意味での合理性には従うものとみなす。

[R4] 行為者が ϕ することを意図的に選択したならば、「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自分が ϕ することが自分にとって最もよい」とする行為者自身の判断が存在する。(71)

[R6] 行為者が ϕ することを意図的に選択したならば、「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自分が ϕ するよりも自分にとってよい選択肢は他にない」とする行為者自身の判断が存在する。(77)

すなわち、上の行為者は[R4]に従っていない点において非合理的であるが、[R6]には従っており、そのかぎりでは合理的である。そして柏端は、[R4]を求めたくなる理論家の傾向を「最大値症候群」と呼び、われわれの合理性を捉えるには[R6]の方がふさわしいと考えるの

である。

ではつぎに、柏端が「共同行為」とその行為者をどのように捉えるか、見ておきたい。ある行為の時間的部分や空間的部分がやはり行為である場合、行為には部分全体関係が成り立つ。これに応じて、行為者にも部分全体関係が成り立つことがある。太郎と花子が共同でピザをぜんぶ食べる場合、その行為は、行為者太郎がピザを食べる行為と行為者花子がピザを食べる行為の和である（136～）。そして、ピザをぜんぶ食べるという行為の行為者は太郎と花子の和、すなわち太郎＋花子である。こうした事情の分析に、メレオロジーの形式的な道具立てが駆使される。この太郎＋花子のような行為者が、「共同行為主体」を呼ばれる。

一人称複数形「われわれ」によって指示される共同行為主体は、単数の行為者「私」と全く同じように、つぎのような典型的な実践的推論に従事する。

- (0w) われわれは、自分たちがφするのがよいと判断する。
- (1w) われわれはφがしたい。
- (2w) φするには自分たちはψすればよいとわれわれは思う。
- (3w) ゆえにわれわれはψする。(153)

(0w) と (1w) は実質的に同値である。(2w) は目的と手段に関わる信念で、(3w) が行為に直結する判断である。「われわれ」はこのように実践的推論を行い、それを共同行為に結実させることができる。この点において、共同行為主体は単数の行為者と何も変わらない。一つだけ存在する重要な相違は、共同行為主体の構成員は、「われわれ」がいかなる命題態度を持ちいかなる行為をするかについて一定の信念を持つという点である。これは後に詳述する予定であるから、ここでは自己犠牲に話を進めよう。

黙々と人助けをするM氏は、個人的には、貧しい人々を助けることがよいことだとは思っておらず、そんなことはしない方がよいと思っている。したがってM氏は、先の [R4] にも [R6] にも反して行為している。ではなぜM氏は貧しい人々を助けるのかと言えば、M氏がその一員である政府が、貧しい人々を助ける方が助けないよりもよいと判断しているからである。このようなM氏の行為こそ、柏端の描く典型的な自己犠牲的行為である。

ここでは、M氏個人の判断と、M氏を含む共同行為主体の判断とが衝突している。そしてM氏は、その後者をふまえて意図的に行為する。行為の合理性の原理として、[R6] をさらに緩めたつぎの [R9] を採用すれば、[R4] や [R6] に反しつつも、M氏の行為は合理的だと言えることになる。

[R9] 行為者がφすることを意図的に選択したならば、(1)「すべての選択肢の中で、すべて

の点を考慮して、自身が ϕ するよりも自身にとってよい選択肢は他にない」とするその行為者自身の判断が存在するか、または、(2)「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自身が ϕ するよりも、自身を含むより大きなある共同行為主体にとってよい選択肢は他にない」とするそのより大きな主体の判断が存在する、とその行為者が考えている。(174)

M氏は、この原理に従うことによって合理性を満たしつつ、つぎの意味で自己犠牲的である。

[S2] 自己犠牲的な行為とは、自身の判断と自身を含むより大きな共同行為主体の判断とが衝突するときに、後者に従い前者に逆らうような（つまりもっぱら前者自身の判断においてより劣った）選択を意図して何かをすることである。(176)

貧しい人々を助けるという選択肢と助けないという選択肢のあいだで、M氏は真正のジレンマに直面する。M氏個人は助けないのがよいと判断しており、M氏を一員として含む政府は助けるのがよいと判断しているからである。デザインと履き心地という統合不可能な二つの尺度の存在が、先の買物客に対して l と r という比較不可能な極善の選択肢を提示し、その結果買物客が真正のジレンマに陥ったあげく一方の靴を理由なく選択したのと似たように、ここでは、M氏個人とM氏を含む共同行為主体という二つの行為者が、助けないという選択肢と助けるという選択肢をそれぞれよりよいものとして示し、M氏は真正のジレンマに陥ったあげくその一方を選択する。買物客もM氏も、強い合理性の原理は満たさない。しかし、その代わりに何らかの弱められた合理性の原理を満たすことで、その行為は理解可能なものとなる。M氏の行為をこのように理解することによって、自己犠牲的な行為の可能性が示されると柏端は考える。つまり、このようなジレンマに直面し、自分個人の判断ではなく自分を含む共同行為主体の判断を優先するという選択をすることが、自己犠牲なのである。

II

以上のいささか駆け足の紹介をふまえて、早速、批判的な検討に移りたい。私の批判は、おおむねつぎのようなものと予告しておこう。すなわち、二つの靴の選択に際してジレンマに直面し、その一方を選んだ買物客の例と、「私」にとってよいことと「われわれ」にとってよいこととのあいだでジレンマに直面し、その一方を選ぶM氏の例とは、ある重要な点で根本的に異なっている。前者においては、ジレンマの双方を「極善」とみなす一つの行為者が存在するのに対して、後者においては、ジレンマの一方をよりよいとみなす行為者と、もう一方をよりよいとみなす行為者が異なり、それらの双方を「極善」とみなす行為者は存在しない。それ

ゆえ、M氏を真正のジレンマに直面する行為者として描くことは、どうやってもできないのである。

M氏の事例をふり返ってみよう。それは、つぎのような二つの判断が共存するという事態である。

[33] M氏を含む政府は、自分たちが貧しい人々を救済しないよりする方が自分たち政府にとってよいと考えている。(176)

[37] M氏個人は、政府が貧しい人々を救済するよりしない方が自分にとってよいと考えている。(177)

柏端によれば、これら両者はある意味では衝突しない。それらが衝突しないのは、一方の信念主体が政府であり、他方の信念主体がM氏だからである(177～178)。したがってそれらは、同一の信念主体がpと信じつつpでないと信じるような仕方では衝突しない。だがもちろん、それらは別の意味で衝突する。両者はいずれもM氏の身体に関わり、両者がともに満たされるような身体運動のタイプは存在しないからである(178)。

だが、M氏の直面した状況は、いかなる意味でジレンマなのだろうか。この点をよく考える必要がある。そのジレンマの葛藤は決して、M氏の身体を舞台とする力と力のぶつかり合いではないだろう。ジレンマがもし、力と力のぶつかり合いとみなされてかまわないのであれば、話はつぎのように進むはずである。すなわち、[33]は一方が他方よりよいという政府の判断であるが、これは次いで、貧しい人々を助けるという政府の意図の形成をもたらす。そしてそれが原因となってこんどは、助けるという実際の行為が試みられる。これと同時に[37]からは、貧しい人々を助けないというM氏の意図が形成される。そしてそれが原因となって、助けないという実際の行為が試みられる。これら、[33]に発する流れと、[37]に発する流れとは、「判断」や「決断」の仲裁を得ることが一度もないまま、M氏の身体に直接はたらきかける。そして、強い方が勝つ。

上の見方は、ほぼ文字どおりの意味で、「力と力のぶつかり合いモデル」と呼びうるものである。ここでは二つの力が綱引きを演じており、勝った方の行為が完遂され、負けた方が挫折する。綱にあたるのがM氏の身体であり、M氏個人と政府が綱引きのプレーヤーである。このとき敗者は、心のはたらきとしての「決断」によって勝者に道を譲ったのではない。そうではなく、敗者の観点からすれば、意図したとおりに身体が動かなかったにすぎない。より強い力の存在によって、身体が押さえつけられたのである。それは、体を起こそうという意図が大男に押さえ込まれていることによって挫折する場合と同じである。

M氏の直面したジレンマがもたらす葛藤は、このようなものではないだろう。M氏は、[R9]

には従うような合理的な選択の結果、政府の一員として貧しい人々を助けることを選んだ。このような決断を、柏端は「折り合い」と呼んでいる（179）。そのような名で呼ぶのは、M氏の決断が満たすとされる合理性が、非常に弱いものにすぎないからであろう。しかしいずれにせよ、葛藤とそのあげくの折り合いが最低限の合理性を満たす以上、葛藤は力と力ではなく命題態度と命題態度のあいだに成立するものであり、折り合いは心のはたらきとしての一種の判断でなければなるまい。さらに、折り合いをつけたのがM氏である以上、それはM氏の判断であらねばなるまい。そして、ひとたび政府の方針を優先させるというかたちで「折り合い」が成立したならば、M氏は貧しい人々を助けないという行為を試みることはないであろうし、そのような意図の形成にさえ至らないであろう。

「力と力のぶつかり合いモデル」は、このように、柏端の念頭にある「折り合い」の概念とうまく折り合わない。しかもそれだけではない。このモデルは、M氏を含む共同行為主体の判断なり意図なりが、M氏個人の判断を経由することなく、直接、M氏の身体にはたらきかけうることを前提とする。これはいわば、M氏の身体が文字どおり、M氏を含む共同行為主体の「手足」となりうるという考え方である。共同行為主体の判断が、その手足たるM氏の身体を、直接動かすのである。これは非常に直観に反する考え方と言わざるをえない。柏端自身、この可能性にわずかに言及した上で、それを採らない道を選んでいる（169～170）。

「力と力のぶつかり合いモデル」を採用しないとすると、貧しい人々を助けるというM氏の行為は、結局、そうしようというM氏の判断を経由して導き出されたことになる。それが、柏端が「折り合い」と呼んだものである。だが、M氏が[33]と[37]のあいだで判断を下しうるのは、[33]の政府の判断を反映するものが、何らかのかたちでM氏自身の命題態度の中に存在しなければならないであろう。これは、人がどちらにしようかと考えるときには、いずれの選択肢もがその人によって表象されていなければならないという、基本的な論点である。[33]は政府の判断であるから、これはまだM氏の命題態度ではない。仮にM氏が政府の判断について知りもしなかったら、M氏は「折り合い」をつけようとするに至らないだろう。するとここで検討すべきは、助ける方がよいという「政府」の判断が、どのようなかたちで「M氏個人」の命題態度に降りてくるかである。これは一般的に言えば、共同行為主体「われわれ」の持つ命題態度が、その構成員である「私」の持つ命題態度に、どのように関わり合うかという問題である。形而上学的には、「われわれ」と「私」は全体と部分の関係にあるのであった。では命題態度に関しては、「われわれ」と「私」はいかに関わるのであろうか。

III

柏端はこの文脈で、共同行為の構成員が持つ「相互信念」に言及する（144～、151～、154～）。共同行為主体が行うとされた、先の実践的推論（0w）～（3w）を思い出そう。

(0w) われわれは、自分たちがφするのがよいと判断する。

(1w) われわれはφがしたい。

(2w) φするには自分たちはψすればよいとわれわれは思う。

(3w) ゆえにわれわれはψする。(153)

柏端は、共同行為の構成員の各々が、これら (0w) ~ (3w) を内容とする信念を持つと言う。これを、太郎と花子が共同でピザをぜんぶ食べる例で考えると、こうなる。たとえば (1w) に関して、太郎は、自分たちがピザをぜんぶ食べたいと信じる。また (2w) に関して、太郎はたとえば、自分たちがピザをぜんぶ食べるには、太郎が最初に半分を食べ、次いで花子が残りの半分を食べればよいと、自分たちが思っていると、信じる。(0w) ~ (3w) は、共同行為主体の信念や欲求などである。柏端によれば、構成員の各々は、それら共同行為主体の信念や欲求などを「内容」とする、「信念」を持つ。そしてこれらの信念はすべて、ある重要な意味で、観察に基づかない。

ちなみに柏端がこれを「相互信念」と呼ぶのは、構成員の持つこれらの信念を基底として、自分の持つそれらの信念が他の構成員にも伝わっているはずだという、さらに高階の信念がここに加わってくるからである。たとえば太郎は、自分たちがピザをぜんぶ食べたいという自分の信念が、花子にも知られているはずだと信じる。だがここでの私の目的にとって、相互信念をまさしく「相互」信念たらしめるこれら無限の相互的な命題態度の存在はあまり関係がないので、立ち入らないことにする。私の目的には、相互信念の基底となる信念、つまり前段落で述べた信念だけで十分である。

さらにもう一つ、あまり立ち入りたくない疑問がある。「私」と「われわれ」のあいだに成り立つ形而上学的な関係は、部分と全体の関係であった。しかしこのことは、「われわれ」の命題態度を内容とする信念を、「私」が観察によらずに持つということを、何らかの仕方で保証してくれるのであろうか、それともしてくれないのであろうか。両者の形而上学的な関係を、メレオロジーによって精緻に形式化されうる部分全体関係によって捉えたことは、両者の持つ命題態度に関して存在する関係がどのようなものであるかを規定するにあたって、何か役に立っているのだろうか。あるいは、むしろこれとは逆の方向で、「私」と「われわれ」の命題態度のあいだに一定の関係が成立するという条件が満たされるときに、「われわれ」という存在者が成立すると考えるのが正しいのであろうか。この疑問は、実は後に尾を引くかなり深刻な疑問なのだが、ここで深入りすることは避けよう。

この関連で最も重要なのは、以下の論点である。柏端は、共同行為主体の信念や欲求を、構成員個々人の信念や欲求に分析することはできないと考える。すなわち、上の (0w) ~ (2w) を、つぎのようなものから構成されていると考えることはできない。

[26] 私は、われわれが ϕ するのがよいと判断する。

[27] われわれが ϕ することを私は欲する。

[28] われわれが ϕ するにはわれわれは ψ すればよいと私は思う。(156)

柏端によれば、(0w) ~ (2w) と上の [26] ~ [28] のあいだには、そもそも論理的な結びつきがない (156)。だから、前者が成り立って後者が成り立たないこともありうる。たとえば (1w) は、われわれは ϕ がしたい、というわれわれの欲求であった。その「われわれ」の欲求を「私」が共有して、われわれが ϕ することを私が欲するという必要はない。先に相互信念との関連で、私が持たねばならないとされた信念は、「私は、われわれが ϕ がしたい、と信じている」というものであった。これは、われわれの欲求がいかなるものであるかについて、私が持つ信念にすぎず、[27] とは全く異なる。一般に、私はわれわれがどのような信念や欲求などを持つかについて、信念を持たねばならないが、われわれの持つ信念や欲求を、私が自らの信念や欲求として共有する必要はない。

再び、黙々と人助けをするM氏の事例に戻ろう。M氏を含む共同行為主体である政府は、[33] と [34] の判断を下している。これらは (0w) および (1w) に対応する。

[33] M氏を含む政府は、自分たちが貧しい人々を救済しないよりする方が自分たち政府にとってよいと考えている。

[34] 政府は、救済活動を行いたいと考えている。(176)

上述の議論をふまえると、M氏はつぎの [34A] を持つ必要はあるが、[34B] を持つ必要はない。

[34A] 政府は救済活動を行いたいと考えている、とM氏は信じている。

[34B] 政府が救済活動を行うことを、M氏は欲している。

政府はまた、つぎの信念を持つ。

[35] 政府は、自分たちが救済活動をするためにはM氏がこの場所で食料を配る必要があると考えている。(176)

これに対応して、M氏はやはりつぎの [35A] を持つ必要があるが、[35B] を持つ必要はない。

自己犠牲は本当に可能か

[35A] 政府は、自分たちが救済活動をするためにはM氏がこの場所で食料を配る必要があると考えている、とM氏は信じている。

[35B] M氏は、政府が救済活動をするためには自分がこの場所で食料を配る必要がある、と考えている。

[34B] と [35B] からは、M氏自身の判断として、つぎの [36B] が帰結する。

[36B] M氏自身がこの場所で食料を配るのがよい、とM氏は考えている。

しかしM氏は、[34B] や [35B] を持つことを要求されていない。他方、M氏に要求される [34A] と [35A] から帰結するのは、つぎの [36A] にすぎない。

[36A] M氏がこの場所で食料を配るのがよいと政府は考えている、とM氏は信じている。

これは、政府の意向についてのM氏の信念であり、自分がどうするのがよいかについてのM氏の判断ではない。

これで、議論の道具立ては出そろった。柏端によると、自己犠牲の可能性をもたらすジレンマは、[33] と [37] の共存によってもたらされるのであった。

[37] M氏個人は、政府が貧しい人々を救済するよりしない方が自分にとってよいと考えている。(177)

私は、「力と力のぶつかり合いモデル」を拒否するのであれば、ジレンマの中で決断を下すM氏の判断が存在すると考えねばならないと主張した。そしてそのためには、[33] からもたらされるM氏自身の命題態度がなければならぬと論じたのであった。いまや、その命題態度が見つかった。すなわち [34A] ～ [36A] である。

IV

ここで私の結論を言ってしまう。私には、[37] と [34A] ～ [36A] がどうしてM氏にとってのジレンマを構成しうるのか、わからない。柏端は、[37] をM氏の「信念」と呼んでいる(178)。私は、柏端はそこで道を誤ったのではないかと思う。[37] は、信念と考えられるべきではない。それはむしろ広義の欲求であり、しばしば「賛成的態度(pro-attitude)」と呼ばれるものである。[37] は、もとをたどれば、M氏の持つさまざまな欲求、価値評価をふまえて形

成されたものである。それら欲求や価値評価の中には、たとえば貧しい人々を助けることへの嫌悪感などが含まれるだろう。そして [37] は、もしジレンマがなかったならば、そのままある一つの意図、すなわち政府による救済活動に参加しないという意図をM氏にもたらし、それはさらに、救済活動への不参加という一つの行為をM氏にもたらしただであろう。[37] は、このようなかたちで行為への動機づけとなるものであるから、それは行為の説明の信念欲求モデルにおいて信念の側に分類されるものではなく、むしろ欲求の側に分類されるものである。「賛成的態度」とは、ちょうどそのような広い意味で、動機づけとなるもの全般を捉えるために用いられる概念である。

それに対して [34A] ～ [36A] は、政府の意向についての単なる信念である。それらは賛成的態度ではない。先に見たように、[34B] はM氏の賛成的態度であり、これと [35B] とからは、自分自身の行為に関するM氏の賛成的態度 [36B] が帰結する。だが、[34B] と [35B] をM氏が持たねばならないことは、きっぱりと否定されていたのであった。するとM氏には、政府の意向を反映するようなM氏自身の賛成的態度はないことになる。賛成的態度がないということは、M氏をそのように動機づけるものがないということである。他方 [37] は、M氏自身の賛成的態度であり、M氏を動機づけるものである。これでは、ジレンマにならないのではないだろうか。私の考えが正しければ、M氏は何も悩まずに、[37] をふまえて救済活動への不参加という行為を選択するだろう。

ジレンマは賛成的態度どうしのあいだで生じねばならないという論点は、先に見た靴屋の買物客の例を考えればよくわかる。比較不可能な二つの靴のあいだで選択をするに際して「理由のない決断」を行った買物客には、靴 l と靴 r のいずれもが、極善の選択肢であった。これはつまり、彼が l の購入に対しても r の購入に対しても賛成的態度を持っていたということにはかならない。実際彼は、l はデザインの点で、r は履き心地の点で、それぞれ気に入っていた。つまり彼は、l を買いたいという思いも r を買いたいという思いも持っていた。だからこそ、ここには真正のジレンマが成立し、彼は「理由のない決断」というかたちで選択を行った。この点で、この事例はM氏の事例と決定的に異なるのである。

一つ、補足的な論点を挙げておきたい。信念と賛成的態度の衝突というものが、全く意味をなさないわけではない。私はK2に登りたいと思う。だが私は、自分の体力と登攀技術ではK2に登ることなどできないと信じている。このときたしかに、登りたいという賛成的態度の前に、登ることができないという信念が立ちはだかる。これはある意味で、両者の衝突と呼べるだろう。そして衝突の結果、私は登りたいという思いをあきらめ、私の賛成的態度は挫折する。しかし、M氏の事例はこの事例と全く似ていない。まず、K2登山をあきらめた私は、ジレンマに直面したわけではない。私は単に、達成不可能な望みを捨てるという合理的な決断を行ったにすぎない。逆に、救済活動に参加したM氏は、参加しないことができないという信念を持っ

自己犠牲は本当に可能か

ていたわけではない。彼の持っていた信念は、自分が救済活動に参加するのがよいと政府が考えている、という信念にすぎなかった。

話を本筋に戻そう。ここまでの議論からもはや明らかであろうが、私の論点を一言で整理すると、真正のジレンマが成立するには、衝突する賛成的態度を持つ単一の行為者がなければならない、という原理に帰着する。この原理が満たされないから、M氏はジレンマに直面しえないのである。だが、柏端はおそらくこの原理を認めず、つぎのように主張するであろう。M氏の事例において、賛成的態度の衝突は、「政府」の賛成的態度と「M氏個人」の賛成的態度のあいだで生じている。衝突に関しては、これで十分である。他方たしかに、M氏がこれに折り合いをつけるには、政府の賛成的態度を反映する何らかの命題態度がM氏自身になければならない。だがそれは、政府の賛成的態度に関する信念で十分である。だから、衝突する賛成的態度を持つ単一の行為者は、必要ない。実際 [R9] は、そのような考えを定式化したものとみなされるべきであろう。

[R9] 行為者が ϕ することを意図的に選択したならば、(1)「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自身が ϕ するよりも自身にとってよい選択肢は他にない」とするその行為者自身の判断が存在するか、または、(2)「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自身が ϕ するよりも、自身を含むより大きなある共同行為主体にとってよい選択肢は他にない」とするそのより大きな主体の判断が存在する、とその行為者が考えている。(174)

これに対して私は、M氏自身の賛成的態度でないものが、どうしてM氏を動機づけることができるのか、さっぱりわからない、とまずは愚直に答えてみたい。だから私は [R9] を認めない。[R9] の (2) を満たすことで [R9] を満たす行為者は、自分のものではない賛成的態度に動機づけられているから、私に言わせれば理解可能な合理的行為者ではない。(2) にある行為者自身の命題態度はただの信念なので、合理的な行為者がそれのみをふまえて行為することなど、できるわけがない。信念のみに基づいて人が合理的に行為しようという考えは、アリストテレスに遡る伝統的な合理性の概念に、大きく反するものではないだろうか。だがこのような返答は、柏端には、彼の示した自己犠牲の描写に対する単なる拒絶反応にしか見えないかもしれない。そこで私は、[R9] に対する疑念を高めるべく、もう少し議論を続けよう。

V

L氏は民間人で、政府の方針には概して批判的であり、なるべく政府とは関わり合いたくないと思っている。しかし政府は貧しい人々を助けることに積極的であり、そのためには民間人

たるL氏が一定の活動を行うことが必要だと考えている。そしてL氏はそのような政府の意向を知る。するとこのときL氏は、政府の一員でないにもかかわらず、先の[34A]～[36A]と同じ信念をやはり持つだろう。M氏とL氏は、タイプの同一の命題態度を持つのである。

ここで、L氏もM氏と同様、黙々と救済活動に協力したとしよう。だがこのとき、そのようなL氏の行為も、つぎに示す合理性の原理[R10]を満たすことで、理解可能でありつつ自己犠牲的であることはできないであろうか。

[R10] 行為者が ϕ することを意図的に選択したならば、(1)「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自身が ϕ するよりも自身にとってよい選択肢は他にない」とするその行為者自身の判断が存在するか、または、(2)「すべての選択肢の中で、すべての点を考慮して、自身が ϕ するよりも、ある他者にとってよい選択肢は他にない」とするその他者の判断が存在する、とその行為者が考えている。

「他者」は、自分自身と異なる行為者一般を指す。それは個人であっても共同行為主体であってもよい。自分自身を含む共同行為主体も、他者の一つではあるが、それはあくまでも他者のきわめて特殊な事例である。

これは、他者のために自己犠牲的に行為することは可能か、という問題である。[R9]と[R10]の実質的な相違は、「自身を含むより大きなある共同行為主体」を「ある他者」に置き換えただけである。[R10]を合理性の原理として受け入れるならば、他者のために自己犠牲的に行為する可能性が開かれる。柏端は当然、[R10]を受け入れたくないだろう。柏端は、政府の判断を優先させるM氏の行為は合理的たりうるが、L氏の同様の行為は非合理的だ、と言うに違いない。では、[R9]を受け入れつつ[R10]を受け入れないことには、いかなる合理的な根拠が存在するであろうか。柏端が[R9]を弱められた合理性の原理として提案するのであれば、私が[R10]をさらに弱められた合理性の原理として提案することは、何がいけないのだろうか。

この問いに対しては、二つの答えが可能だと思われる。第一に、自身を含む共同行為主体はその行為者自身を含むが、他者はその行為者を含まないという点に、決定的な違いがあるではないかとの答えがあるだろう。だがこの答えに対しては、その違いがどうして、[R9]は合理性の原理としてふさわしいが[R10]はそうでない、という違いをもたらすのかともう一度問い返したい。いったいどうして、自分を含む共同行為主体の賛成的態度を優先することは合理的で、他者の賛成的態度を優先させることは非合理的なのだろうか。

私は結局、メレオロジーによって形式的に描きうる形而上学的な関係としての部分全体関係が、全体と部分とのあいだに成り立つ合理的な関係をいかに規定しうるのか、よく理解できな

いのである。形而上学と合理性は、いったいどのように関わり合うのだろうか。前者が後者を規定しうるのだとしたら、それはなぜなのだろうか。あるいは逆に、後者が前者を規定すると考えるべきなのだろうか。だが、それらはむしろ別個の事柄ではないだろうか。しかもこれは私が先に、行為者のあいだに部分全体関係が成り立つと、なぜ、全体である共同行為主体の持つ命題態度について、その構成員である行為者が観察によらずに信念を持ちうるのか、よくわからないと述べたのと似たような疑問である。形而上学的な関係は、信念の獲得や行為の合理性に、いったいどう関連するのか。私には、柏端がこの問題を手つかずのまま残しているようにすら感じられる。

あるいは、この「観察によらない」信念という論点が、ここでの鍵を提供してくれるのかもしれない。そしてそれが、上の問いへの第二の答えとなる。すなわち、ある行為者が自分自身以外の行為者の命題態度を観察によらずに知りうるのは、前者と後者のあいだに部分全体関係が成立するときに限られる。そして、行為者の行為が合理的であるのは、それが観察によらずに知られた賛成的態度をふまえたものであるときに限られる。こう考えれば、行為者の行為が合理的であるのは、それが自分自身の賛成的態度または自分自身を部分として含む共同行為主体の賛成的態度をふまえたものであるときに限られることになり、[R9]を受け入れて [R10]を受け入れないという柏端の方針と合致する。

この議論は、合理性と形而上学を直接的に結びつける議論よりは有望かもしれない。しかし私には、それもやはり多大な困難を抱えているように思われる。まず、上の議論の第一の前提、すなわち、ある行為者が自分自身以外の行為者の命題態度を観察によらずに知りうるのは、前者と後者のあいだに部分全体関係が成立するときに限られるという論点は、決して自明なものではない。だが私は、これはいったん認めて素通りすることにしよう。すると、政府の一員でないL氏は、政府の意向を観察によらずに知ることはできないことになる。そこで、L氏はそれを観察によって知ると想定して話を進めよう。

では第二の前提、すなわち、行為者の行為が合理的であるのは、それが観察によらずに知られた賛成的態度をふまえたものであるときに限られるという論点は、十分に擁護できるであろうか。これは言い換えれば、賛成的態度を観察によらずに知ることが、それをふまえた行為の合理性の必要条件だということである。こうした主張は通常、つぎのような論拠に基づいてなされる。すなわち、自らの命題態度や四肢の位置について何らかの直接的な知識を持つことなしには、行為者は合理的に行為することができない。もし、観察によらないそうした知識がなかったならば、自分が何をしたらよいのか、自分に何ができるのか、行為者は全く把握することができず、合理的な行為は不可能となる。ここでその理由を詳述する余裕はないが、私は、この主張自体はたいへん正当なものであると思う。ゆえに私は、上述の論点は十分に擁護可能だと考える。

しかし、この主張を確立するにあたっては、観察によらずに知られる諸状態が、まさに「自分自身の」諸状態として知られるということが決定的に重要である。観察によるかよらないかは、単なる知り方の違いにすぎず、それ自体としては重要なことではありえない。それが重要なのは、観察によらない知識が、まさに自分の諸状態についての知識であるという保証を伴うからである。だからこそ、それは「自分自身の」行為に直結しうる。もし仮に、観察によらずに知られた諸状態に関して、それが自分のものであるかどうかを留保しなければならないとしたら、その知識に基づいて直ちに何かを行うことなどできないであろう。そのような知識が自分の行為にいかに関与しうるかは、まだわからないということになるだろう。当然、それは合理的な行為の必要条件たりうるようなものではない。したがって、観察によらない知識が行為の合理性の必要条件だと主張したければ、M氏が自分自身以外の命題態度、たとえば政府の賛成的態度を観察によらずに知るなどという考えは、認めてはならない。観察によらない知識は自分自身の諸状態についての知識であることが保証される、という考えを譲ってはならないのである。言うまでもなく、M氏が政府に対して形而上学的な部分全体関係に立つという話を、ここで再び持ち出してみてもむだである。それがなぜ上の点を譲歩すべき特別な理由となるのか、全くわからないであろう。

ゆえに、M氏の行為は観察によらずに知られた政府の賛成的態度をふまえたものだから合理的だが、L氏の行為はそうでないから非合理的だ、という議論の道筋は閉ざされる。観察によらない知識というものをよく考察すると、[R9] も [R10] も等しく退けるべきことがわかったのである。私は先に、私が第一の前提と呼んだものをそのまま認めて素通りした。第一の前提を論理的に退けるには、部分全体関係にない二つの行為者のあいだに、観察によらない知識が成立しうると言う必要がある。私はそうは言わない。だが私は第二の前提の検討を通じて、部分全体関係が存在しようとしまいと、観察によらない知識が二つの行為者のあいだに成り立つと考えるべきではないと言うに至った。つまり私は、第一の前提を退けはしないが、それをトリヴィアルな意味でしか認めないのである。なお、このことはむしろ、M氏がL氏と同様、政府の意向を観察によって知ることを妨げはしない。それどころか、政府の一員であるM氏は、政府の意向を通常の場合知るだろう、などと主張してもかまわない。

M氏が政府の賛成的態度を観察によらずに知るということを、出発点として認めるべき事実と考えた人には、このような私の議論は暴論と映るかもしれない。しかしM氏がそのような知識を持つという考えが、そもそもかなりいかがわしい主張であることは、少し冷静に考えればわかることである。観察によらない知識の典型例は、一人の人間である行為者が、自分自身の心的状態や四肢の位置を、直接的な、媒介要因を経ない仕方で知ることである。M氏が政府の意向を知るときの状況は、これとはあまりにも異なる。ここで、政府の命題態度を当の政府が観察によらずに知りうるという点は、それが何を意味するのであれ、認めることにしよう。し

かしこれを仮に認めても、M氏は政府と同一ではなく、その一員にすぎないのだから、政府が政府の意向を知るような仕方で、M氏が政府の意向を知ることはできない。M氏はおそらく、口頭の命令や文書での通達によって政府の意向を知るしかないだろう。これはM氏にとって、むしろ観察に似た知り方ではないだろうか。命令や通達を通じて知ることは、M氏がM氏自身の心的状態や四肢の位置を知る際の、媒介要因を経ない直接的な知り方とは、似ても似つかない。すると、共同行為主体の賛成的態度が、その構成員に観察によらずに知られうるという想定は、どうやら最初から、あまり真に受けるべきものではなかったのである。

結局、M氏の行為は合理的だがL氏の行為はそうでないこと、つまり、[R9] は受け入れてよいが [R10] はそうでないことには、未だに納得のゆく論証が与えられていない。これまで見たように、形而上学的な部分全体関係に訴えるだけでは、他者のための自己犠牲がなぜ非合理的であり不可能であるかについて、十分な説明はできないだろう。他方、観察によらない知識という論点は、たしかに行為の合理性と関連を持つ論点ではあるが、それに訴えることは、M氏の行為を合理的な自己犠牲的行為とみなすという目的にとっては役に立たないだろう。そこから出てくるのは、[R9] も [R10] も受け入れてはならないという結論にほかならないのである。

VI

これまでの議論からわかるように、私の見るところ、[R9] を受け入れることには十分に合理的な根拠があるとはいえない。これは、救済活動への参加というM氏の行為が、政府の賛成的態度によって直接的に動機づけられるとは考えられないということである。すると、M氏とL氏の相違に対する納得のゆく説明は、つぎのようなものにならざるをえないのではなかろうか。私はそれを「命題態度の分有モデル」と呼び、柏端の考えに対する一つの代案として提出してみたい。

「命題態度の分有モデル」によると、自身を含む共同行為主体が持つ賛成的態度を、その構成員たる行為者が判断に際して考えに入れねばならないということは、結局、構成員が何らかの意味で、共同行為主体の持つ命題態度をそのまま自らのものとして分かち持つということに存する。これはつまり、M氏の例で言えば、M氏が [34B] と [35B] を持つことにほかならない。われわれ政府が、われわれが救済活動を行うことを欲している以上、その一員たるM氏もやはり、われわれ政府が救済活動を行うことを欲するのである。これを正確に一般的に言い直すと、部分全体関係の成立は、全体が持つ信念や賛成的態度と同じ内容を持つ命題態度を、部分がそのまま自らの信念や賛成的態度として持つことをもたらすのである。[34] と [34B]、[35] と [35B] は、まさにそのような関係にある。

「命題態度の分有モデル」は、二つの行為者が部分全体関係にあるとき、それらの持つ命題

態度がどのように規定されるかについての一つの考え方である。それは、柏端が提示するものよりもはるかに単純な方向である。とはいえ、全体が持つ命題態度を部分が分かち持つという論点は、記述的にはあまり説得力がないだろう。政府が[34]や[35]の命題態度を持つとき、M氏が事実として必ず[34B]や[35B]を持つと主張することは、いささか無理な相談である。とりわけ[35B]は信念であるから、それを[34B]のような賛成的態度と同様に扱ってよいかどうか、注意深い検討が必要であろう。ここでその検討を行う余裕はないが、ともあれ私は、この論点はむしろ規範的な意味で捉えた方がよいと思う。すなわち、M氏は[34B]～[36B]のような命題態度を持つべきである。言い換えれば、政府の一員たるM氏には、[34B]～[36B]を持つことへのコミットメントが生じるのである。そして、これも立ち入ることはできないが、[34B]～[36B]へのコミットメントの成立においては、[34A]や[35A]が何らかの役割を果たすことを認めてもよいだろう。その際、[34A]や[35A]が観察によらずに得られた信念だと想定する必要はなかろう。

このモデルを採ったとしても、M氏は、柏端が「没入型自己犠牲」と呼んだタイプの行為者になるわけではない。没入型自己犠牲とは、行為者が、自身を含む共同行為主体の賛成的態度を全面的に自らのものとして受け入れ、自分がもともと持っていた賛成的態度を放棄してしまうことである(180)。M氏がそのような行為者である必要はない。M氏は[34B]～[36B]を持ちつつ、同時に[37]を保持していかまわぬ。尤もそのとき[37]は、M氏の最終的な判断ではなく、「M氏個人の内発的な観点から見て」の判断へと相対化される。同様に[34B]～[36B]も、「M氏自身を含むより大きな共同行為主体の判断へのコミットメントという観点から見て」の判断へと相対化されたうえで、M氏の判断となる。

するとここに、[37]の示す選択肢と、[34B]～[36B]の示す選択肢とのあいだで、M氏にとっての真正のジレンマが生じる。これは、靴屋の買物客が、デザインと履き心地という二つの統合不可能な尺度の存在により、比較不可能な二つの極善の選択肢のあいだで真正のジレンマに陥ったのと基本的に同じ構図である。M氏個人の内発的な観点と、共同行為主体の判断へのコミットメントの観点が、統合不可能な二つの尺度の役割を果たす。そしてM氏は「理由のない決断」として、いずれの側に軍配を上げてよい。後者を選択した場合にのみ、M氏は「自己犠牲」的に行為したことになる。

柏端が、M氏が[34B]～[36B]を持つという考えに反対した理由の一つは、共同行為主体に対してその構成員が「反逆」という可能性を認めたいからである(158)。その事例を簡単に紹介しよう。ティナとリーナはいっしょに歩くという共同行為を行う。しばらく歩いたところで、リーナは急に「私帰る」と言い出す。リーナがそう言ったとき、あるいはそう言い出す直前、リーナにはもはやいっしょに歩きたいという欲求がない。だが、共同行為主体ティナ+リーナの持つ、いっしょに歩くという意図はそのときもまだ残っている。さもないと、

リーナが「私帰る」と言っただけでその意図に反逆する必要は、そもそもないからである。だとすると、共同行為主体の意図や欲求があっても、その構成員がそれと同じ内容の意図や欲求を持つとは限らないことになる。

私はこの事例を、つぎのように再記述することができると思う。ティナ+リーナが歩き始めたとき、ティナ+リーナにはいっしょに歩く意図があった。そしてその時点ではたぶんリーナ個人にも、いっしょに歩くことへの内発的な賛成的態度があった。ところが途中でリーナには、その内発的な賛成的態度がなくなってしまい、いっしょに歩きたくないという思いがそれにとって代わった。しかし、いっしょに歩くことへの意図がティナ+リーナに残っている以上、リーナ個人にも、その意図へのコミットメントとして、いっしょに歩くことへの賛成的態度が残っている。二人がいっしょに歩き続けているあいだ、リーナの中で、二つの観点が争いつつ、軍配はまだコミットメントの側に上がっている。ところがついに内発的な観点が形勢を逆転すると、「私帰る」と言うことによって、リーナは共同行為主体の意図を抹消した。ただちに、その意図へのリーナのコミットメントも消滅した。当然、リーナはいっしょに歩くのをやめるだろう。おおむねこのように考えれば、共同行為主体に意図や欲求といった賛成的態度があるかぎり、その構成員に同じ内容を持つ賛成的態度へのコミットメントがあるという主張は、「反逆」の事例と整合させることができそうである。したがって反逆の可能性は、「命題態度の分有モデル」に対する反対論拠にはならない。

いずれにしても、「命題態度の分有モデル」は、柏端の考えとはかなり趣を異にする代案である。M氏とL氏の事例に話を戻すと、M氏の行為が合理的で、L氏の行為が非合理的だという帰結がそこから生じることは、自明であろう。だがこれは、[R9] が受け入れ可能で [R10] がそうでないことを示すものではない。むしろこの代案によると、[R9] は不要であり、合理性の原理としては [R6] で十分なのである。[34B] ～ [36B] の示す選択肢と、[37] の示す選択肢は、いずれもM氏にとっての極善の選択肢である。したがってある意味で、[34B] ～ [36B] を優先させる行為は、自己犠牲的な行為ではない。なぜならば、そうすることはM氏にとってよいことであり、M氏の行為は広い意味での利己的な行為だからである。それをどうしても自己犠牲的な行為と呼びたければ、たとえばつぎのように「自己犠牲」の定義を変える必要があるだろう。

[S3] 自己犠牲的な行為とは、自身の内発的な観点からの判断と、自身を含むより大きな共同行為主体の判断へのコミットメントという観点からの判断とが衝突するときに、後者に従い前者に逆らうような（つまりもっぱら前者自身の判断においてより劣った）選択を意図して何かをすることである。

結

そろそろまとめようと思う。結局私は、[R9]を受け入れることができなかった。それがどうして「合理性」の原理と言えるのか、理解できなかった。それは、二つの行為者のあいだに成立する部分全体関係という形而上学的な関係、それらのあいだに生じる「観察によらない知識」、そしてそれらの行う行為の合理性、この三者の関連性について、柏端の説明に納得ができなかったからである。私は最後に、「命題態度の分有モデル」という、[R9]を不要として[R6]で済ませる代案を提出したが、柏端がこれを受け入れることはないだろう。なぜならば、[R9]を提案することこそが、本著における彼の最大の目論見なのだろうからである。

これまでの議論全体をふまえてもなお、柏端の目には、私が[R9]に対して頑迷な無理解と拒絶反応を示しているだけのように映るかもしれない。残念ながら、それが最もありそうである。だが、他にも可能性はないだろうか。もしかしたら、柏端は「力と力のぶつかり合いモデル」でよいと言うかもしれない。「力と力のぶつかり合いモデル」は、自己犠牲的な行為に当の行為者の「判断」があることを許容しないが、[R9]を受け入れて[R10]を受け入れないこととは整合する。

もう一つの興味深い可能性は、[R9]だけでなく[R10]も受け入れてしまうことである。もちろんそのためには、[R10]がなぜ合理性の原理としてふさわしいかが十分に論じられねばならない。私自身には、どうしたらそんなことができるのか、見当もつかない。だが、われわれの素朴な「自己犠牲」の概念は、われわれが自分自身を含む共同行為主体のためにのみ自己を犠牲にしようというものではなく、むしろ、純然たる他者のためにも自己を犠牲にしようというものではないだろうか。「自己犠牲」の哲学的分析は、この素朴な直観を救うものであることが望ましいだろう。自分が含まれる共同行為主体のためでなければ自己を犠牲にしない人は、どこか料簡の狭い人である。できることならば、われわれはもっと心広くありたいものである。

* 柏端達也著、『自己欺瞞と自己犠牲：非合理性の哲学入門』、勁草書房、2007年。